

ホトトギス

昭和二十四年二月二十八日運輸省特別取扱承認雑誌第六二七号
平成二十二年十月一日発行(第四百十三卷第十号)

ホトトギス

十月号



俳句随想 〔三百四十〕

汀子

俳句は季題を詠む詩である。季題を大事にすることで俳句の良し悪しが分かれるといっても過言ではない。最近、季題について気になる幾つかのことがあるのでそれについて触れたいと思う。それはこの場で何回も触れたことであり、それを読んで下さった方には又か、ということになるが繰返し申し上げることにする。

「若葉」「新樹」「晩夏」という季題は、誰もが親しみ分かりやすい季題であり、身近な季題として多く使われる。「若葉」は木々の葉になる芽は季節の推移と共に春から初夏に向かう明るい日差しも含めた印象を与えてくれる。「新樹」もそれらの明るい若々しい木々の様子が見える。それなのに、何故……、「若葉光」であったり、「新樹光」と光をつけるのであるのか。十七字という短い詩である俳句に、詰め込むように「光」は要らないのである。「晩夏」という季題につけるのも意味がない。「晩夏」という夏が終わらんとしている時期の季節感には、もし光という表現を入れたいならば別に入れて光に意味を与えて欲しい。「花屑」「落花」という季題を嫌って「花筏」という表現に置き換える俳句に出会う。「花筏」という植物がある。これまではそれを詠んできたので私は簡単に容認出来ない。「花屑」として詠んで欲しい。

旬日記 汀子

平成二十一年十月三日 芦屋ホトギス会

雲消してゆける早さに秋の空
月今宵空と約せし如くにも
逡巡の原稿一つうそ寒し

十月四日 関西野分会
未枯れの手入れといふがりにけり
未枯れてゆく庭にある見頃かな
未枯のはじまつてゐる野を活けて

十月五日 下萌旬会
長月と聞きて忽ち二三日
秋晴といふ欠くるなき一日かな
留守多き郵便受けの秋の晴
松手入してゐる下を通りけり
落しもの主へ戻りぬ秋の晴

十月五日 ロイヤル合同旬会
プティックに寄道をして秋深し
シャンデリア深秋の情ほどきけり
界隈の秋を惜みて来し集ひ
少しだけいつもと違ふ秋灯

十月九日 工業倶楽部
台風に一日家居となりしこと
松手入して留守番も兼ねてをり
十月十三日 大阪倶楽部
風少し荒しと思ふ秋の野に
新米といふが馳走でありにけり
水音の中に小鳥の来てをりし
やや寒といふ逡巡の旅支度

旅心ふとあともどりやや寒し
星空へ伸びしきざはし小鳥来る
芝に又何啄みてをる小鳥
十月十三日 綿業倶楽部
いなご跳びぬしをとらへて見失ふ
初紅葉どこからとなくありしかな
横川路の初紅葉とはいへぬほど
つかまへるつもりなければ蝗かな

十月十四日 西の虚子忌
横川路の露踏み重ね五十年
五十年同じ露寒なかりけり
邂逅の身に入む別れ重ね来し
十月十五日 クラブ合同
秋晴の昨日の延長線上に
飄の実の大小を吹き分けて
秋晴の予報の端にある山雨

十月十七日 九州ホトギス同人会
うそ寒しオランダ坂にある陰り
露けしや被爆の痕の見えずとも
十月十八日 九州ホトギス同人会第一旬会
快晴は神のみこころ旅の秋
木犀の香りの中にある祈り
こみ上げてくる露けさよ長崎よ

十月二十日 有恒倶楽部
秋晴を今宵の敷につなげたく
半分は散り敷く桜紅葉かな
やや寒くとも早起きをするつもり
冬支度部屋のかたづけられぬまま
なほ旅のつづきの如く秋の晴
秋晴に從ふ予定ありにけり
忘れものして来しこともやや寒し

十月二十日 無名会
林檎狩してきし重さ残る腕
青空の動きあるかに秋の雲

露けしや被爆の町へ組む旅程
今宵より話題広がる流れ星
秋の雲抜ける緊張着陸す
きざはしを抜け星空へ秋深し
原稿を送りたるより林檎むく
十月二十一日 夏潮旬会
流星を見る身ごしらへ大袈裟な
爐の実に触れたるかぶれかも知れぬ
身に入みて犬の表彰状受けぬ
オリオン座よりの流星見つけねば
食べられる菌と知つてをりながら

十月二十二日 きさらぎ会
流星に夜を明け渡す家居かな
オリオンの辺り流星待つことに
一枚の夜空待たるる流れ星
昼渡りぬし月やがて十三夜
十月二十三日 時雨旬会
出逢ひあり別れのありて初紅葉
流星を見るきざはしを解放す
さんま焼くことも久しき暮しぶり

十月二十四日 旬会と講演の会
旅先の滞在長し秋深し
計画に向けたとへ肌寒くとも
風走るとき萱の穂の生きてをり
星仰ぎぬしとき忘れ肌寒し
十月二十五日 野分会
椿の実拾ひ来し虚子塔のもの
降りつゞく雨未枯をいさなへる
刻々の滞在灯下親しみて
十月二十六日 年尾忌
露寒の雨の忌日のみそなはせ
冬の蜘蛛化身の如く現れし

十月三十日 悼 平尾圭太様
お逢ひせしばかり悲しき十三夜

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十一年十月一日 蕉心会

大川の水の分子に秋の声
やや寒き仕事の量でありにけり
うそ寒きデートの数でありにけり
肌寒きあなたと僕の距離であり
音ほどに進めぬ船や秋の声
船右往左往金風纏ひつつ
白萩を吹き上げる風落とす風
紅寡黙白饒舌にこぼれ萩

十月二日 カトリック新聞選者吟

栄光の賛歌に和して秋の声

十月五日 「俳句研究」出句

神の旅日の本といふ騒きかな
七五三外つ国の母神妙に
あの星に導かれたる聖夜ミサ
うとうとと除夜の鐘聴く寢酒かな
句碑の庭初金毘羅に埋まりけり

十月五日 はせを句会

立待の空の気紛れ見てをりぬ

十月七日 一水会

天高し水惑星は人載せて

十月九日 愛知ホトトギス句会秋季研修会

再会の尾張台風一過かな
爽やかにモアイの視線海へ向く
秋惜む湾の広さでありにけり
爽やかな尾張の風のもてなしに
十月八日 土筆会 台風直撃で句会中止 選者後選

没後五十年の決断西虚子忌

十月十四日 西の虚子忌

初紅葉忌心ほどの色にかな

会へる人もう会へぬ人西虚子忌

西虚子忌名披講子を継げる君

十月十五日 倶楽部合同百回記念句会

秋晴や星のきざはしてふ視界

草動くよりはたはたとなりゆけり

十月十七日 九州ホトトギス同人会、大会

フランススコザピエルに会へさうな秋

天国に近き街並天高し

古を露けく語る宴かな

信仰の街爽やかに人集め

そぞろ寒長崎の道問はれても

十月十九日 朝日カルチャー若草句会

戦艦の生れしドック小鳥来る

菊香る忌日の庭でありにけり

菊日和異国情緒といふ街に

林立のビルの壁より小鳥湧く

十月二十日 草木瓜会

柳散る昔濠今繁華街

青空に応へ無花果熟れにけり

柳散る銀座八丁目稲荷

柳散る平家の魂を鎮めつつ

虚子の世を偲べる山廬柳散る
十月二十日 登高会

横川てふ美しき言の葉西虚子忌

虚子之塔雨に輝き西虚子忌

太陽を浴びても山葡萄の黙

十月二十四日 ホトトギス社句会

肌寒き野球の話せんとつて

ダム底になるやならぬと萱戦ぐ

讃岐より音色繋ぎて瓢の笛

十月二十六日 年尾忌

秋霖の楽を奏でてゐる忌日

鎌倉に台風二十号の余波

十月二十七日 若水句会

蝗追ふ少年の日を近づけて

烏瓜引けば地球の鼓動かな

行秋や禁断の恋今佳境

朱に生れ紅に朽ちゆく烏瓜

行秋や一忌日一忌日過ぎ

炒られたる蝗と目と目合ひにけり

十月二十八日 目黒学園句会

稜線を丸く仕上げて十三夜

落鮎に川幅といふ修羅場かな

山を見て来し落鮎の眼かな

後の月君の項の灰白く

境内の木々色づいて年尾の忌

十月二十八日 銀座和塾

冬支度銀座の夜に始まり

体育の日にも寝てゐるお父さん

十月三十日 カトリック新聞選者吟

小六月猫も来てゐる司祭館

雑詠

廣太郎 選

武士の出陣のごと飛花落花 福山 竹下陶子
 日本に天つ風あり風車 同
 太陽にまみえ筈とはなりぬ 同
 快復を祈るカーネーション束ね 宝塚 水田むつみ
 母の日をきのふにしたる訣れかな 同
 葬る日の新樹やさしく雨零す 同
 君偲びつつ訪ふ花の吉野山 京都 安原 葉
 師の句碑も我等を迎ふ花の宿 同
 霞みつつ富士全容を整へり 同
 山藤のどつさり垂れてみてひそと 熱海 嶋田摩耶子
 初蝶は黄であらまほし黄がとび来 同
 点眼のあとの瞑想囀れる 同
 万緑の奈落は日本海の青 奈良 古賀しぐれ
 万緑のちらばつて島伸びて岬 同
 松並木涼し一湾渡り切り 同
 船隠すまで夏潮の沖続く 香川 湯川 雅
 噴水の空に追ひ返されてきし 同
 平坦な道を横切り登山径 同

ほつほつと散りどつと落ちえごの花 龍ヶ崎 今橋真理子
 朝よりも開き真昼の薔薇となる 同
 紫陽花の瑠璃のひしめく蕾かな 同
 一望は影絵卵の花腐しかな 神戸 山田佳乃
 鍵探す卵の花腐しばかりの日 同
 風の吹くまでのやすらぎ吹流し 同
 そこここに色踊らせて蝶の風 同
 風歌ひマーガレットを揺らしゆく 同
 鈴蘭の音なき鈴に風少し 同
 城山も苑も芽吹き晴れつづき たつの 浅井青陽子
 連休の五月の疲れと諾ひて 同
 娛しまむ余生もがたと緑蔭に 同
 筈を掘りゐる若さ見てをりし 熱海 嶋田一歩
 若竹の葉に新しき風通る 同
 石楠花の落ちて大きな色となる 同
 角の威をやうやく加へ梅雨の鹿 八尾 山下美典
 桑の実や竹馬の友のみな逝きて 同
 それぞれの運命に蜘蛛の子の散りぬ 同
 葉も花も合歡のいのちの蘇る 樞原 稲岡 長
 椽の花まとはり咲きてこぼれ易 同
 耐へ抜きし椽の一花や実となりぬ 同
 ひつそりと元首相邸花ぎぼし 東京 今井千鶴子
 しやくなげの紅それも真くれなぬ 同
 夏草や雲助屯せし昔 同

雑詠句評（九月号より）

芳子・千鶴子・中正
眞理子・憲明・静龍
とほ歩・保佳・むつみ
葉・美奇・廣太郎

行春の俳磚伝ふ雨雫 神戸 千原叡子

虚子記念文学館の庭には、虚子はじめ年尾、汀子先生、誌友の俳句が、俳磚にずらりと刻まれ美事である。開館をして六年目に一千句に達したという。虚子記念文学館にゆくと、必ず窓外に目がゆき素晴らしい句に心打たれる。暮春の庭に偶々雨の降る日に尋ねられた作者が、俳磚に伝ふ雨雫に心をよせられ、しみじみと眺められている静かなそのままの好句と思う。因みに作者の俳磚の句は、「願ふより謝すこと多き初詣」である。（芳子）

芦屋の虚子館の俳磚には古今ホトトギスで活躍した人たちの名句が刻まれている事は御存知の通りである。ここを訪れる毎にこの俳磚を見るのは何方も楽しみであると同時に、故人のものであれば惚ぶ心も生れるのである。平成二十二年はこの俳磚に刻まれ

ている方の訃報が相次いだ。涙雨であろうか。（廣太郎）

弘子恋ひ子鹿を偲び花吉野 東京 大久保白村

追悼句ではないけれども、相次いで突然世を去られたお二人を、花の盛りの吉野にあつて、しみじみ思い出し懐かしんでいる作者。ことに昨年初めて吉野行に参加された子鹿氏はとてもお元気で、これから毎年の花を楽しみにしていると話されただけに、作者の印象に残り、惜しむ心を誘つたに違いない。一句の中に固有名詞が三つも入っており、「花吉野」という語もやや特殊だと思われ、一句全体の心持が揮然として季題に表現されているから、それなりに成功した。がこういう句はなかなか難しいと思う。（千鶴子）

何といつても、平成二十二年の伝統俳壇にとつて山田弘子、岩垣子鹿の御二方を失つた事は、この上もない痛恨事であつた。そして御二方共毎年四月に行なわれる「吉野くつろぎの旅」のメンバーであつた。作者はその吉野の満開の桜の下に佇み、あらためて御二方を偲んでおられるのである。（廣太郎）

天地有情

西に訃の続き日永の一ト日旅 東京 稲畑廣太郎
思ひ出は尽きず遅日の別れかな 同
業平忌眉月細く細くあり 同 今井千鶴子
遂に手を通さぬ母の絹袷 同
健康をとり戻したる更衣 京都 安原 葉
汝は医師我は僧なり更衣 同
こころ喪にあれば潤みて春の月 相模原 木村享史
天地に花冷の貼りつきしまま 同
新緑やよるめく程の孤独感 豊中 瀧 青佳
蚊を叩きくれたる娘の手やはらかや 同
近きより遠きが涼し島の青 奈良 古賀しづれ
百の灯を海へとこぼし宿涼し 同
鰻笥の昭和は遠し堂島川 吹田 宮崎 正
葵祭の佳き日なり今日米寿 同
更衣して二の腕の白さかな 榎原 稲岡 長
水源と見ゆる辺りの茂りかな 同
更衣子等は光と風を着て 豊中 森をさむ
甘党も辛党もなし桜餅 同

先づ招く庭の牡丹百花かな 東京 河野美奇
崩るるも王者なるかな大牡丹 同
黴の書に子曰く曰く 神戸 後藤比奈夫
凸レンズにて凹レンズ金魚玉 同
一声は花鳥の一詩時鳥 福山 竹下陶子
黄塵のホームに東京行のぞみ 同
薫風がなでをり園の百花の譜 たつの 浅井青陽子
ばら展の香に酔ひしれて出て来たる 同
薔薇手入ばらの言葉聞きながら 龍ヶ崎 今橋眞理子
フェンスより薔薇の渦巻あふれんと 同
空にある花アカシヤの渚かな 神戸 長山あや
死の床の父へひと箸鰻めし 同
惜春の庭にかそけし宵の風 箕面 井上浩一郎
花桐の高さに山の風わたる 同
星を見る階合歓を見る台 明石 中杉隆世
朝寝することも失念することも 同
妻滝れてこそその新茶の香りかな 神戸 三村純也
子育ての一段落の新茶かな 同

花子選

天地有情句評

汀子

西に訃の続き日永の一日旅 東京 稲畑廣太郎

訃報に接した心情を日永という季題で心を立て直した。

業平忌眉月細く細くあり 東京 今井千鶴子

眉月が業平を語るが如く。

健康をとり戻したる更衣 京都 安原 葉

病との訣別のチャンス。

こころ喪にあれば潤みて春の月 相模原 木村享史

涙。

新緑やよろめく程の孤独感 豊中 瀧 青佳

自然の緑に癒される対話。

近きより遠きが涼し島の青 奈良 古賀しぐれ

人生観。

鰻鮎の昭和は遠し堂島川 吹田 宮崎 正

古き良き浪花を恋う。

水源と見ゆる辺りの茂かな 樺原 稲岡 長

地球の未来。

(以下略)